

第三章 悪人正機

第一節 純粹宗教と常識的宗教

「一。善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく。悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をやと。この條、一旦、そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。」

悪人正機

「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」

如来の大慈悲は善人よりも悪人に重いとすることは、大慈悲の本質を表したことであり、であります。でありますから、これを行者の自証において表すならば「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」となるわけであります。「しかるを、世の人つねにいはいはく、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をやと。」世の人とは、世間常識の人であります。常識的宗教の人であります。宗教と道徳とを混同している人、言いかえらと、自己を真に知らぬ人、眼の内に開けない人、大慈悲を領解しない人のことでもあります。そうした人は、悪人でも助けられる、だから自分のごとき善人は必ず助かると思っております。反常識が困ったものであるように、常識にとらわれて、常識を越えられないのも困ったものであります。

拒む理由

世の一部の人は、この悪人正機の世界を拒みます。その理由は、それでは正義感が承知しない。悪人こそ往生するというのでは、倫理道徳が破壊せられてメチャクチャになる、因果の道理が成り立たないというのであります。

ある時、長い船路にお隣の船客が退屈しているので、『最後の日』をお見せしたところ、山田憲氏の信仰を読むに至って、「これと同じように、ある処に悪い人間が人を殺してやがて信仰に入り、いわゆるめでたく極楽往生をとげたそうです、すると、その殺された人の家族は、そんなことがあるか、彼が地獄に堕ちてこそわれらは助かるというのでたいへん怒りました。そうではないですか。人殺しが極楽に行つて因果が成り立ちますか。」と、たいへん不平そうに言われました。専門教育ぐらいいは受けた人でありましたが、私は、さして弁明もせず、沈黙しました。その心の中を伺うと、死刑にただけでは承知ができず、さらに永遠の地獄におしやらねば気のすまない、人の心の残忍性がものを言っているようであります。それはけつしてその人の衷心の声ではありません。それは高き文化的教養、言いかえると真実教に値わざる仮我の声であります。その残忍な心こそ、世の中に冷たい悪人を造る心ではありませんまいか。

人生は冷たき裁きによつて成立つのか、哀れなる最後の一人までが熱い大慈悲に撰取されて成立つのか、重大なる問題であります。日本は最後の一人までが、大御心に抱かれて生かされてゆく国であり、ロシアはスターリンの心一つで、気に入らぬ者は

だれでも殺される国であります。大慈悲のみが根本的に人を生かすということとは明かなことでもあります。

大慈悲

涅槃経の中には「阿闍世が為に涅槃に入らず」と世尊は言われました。阿闍世は、仏を敵として反逆し、父を殺し、母を七重の牢に禁じた人であります。この阿闍世がために涅槃に入らない、尊い大慈悲であります。さらに「阿闍世とは普く一切の五逆を造る者に及ぶなり。」と言ひ、「阿闍世とは即ち是れ煩惱等を具足せる者なり。」と説かれます。だれか阿闍世でないものがありましよう。しこうして大慈悲は阿闍世において重いのであります。

阿闍世が前非を悔い、心に悔熱を生じ、体中に瘡かさを生じ、七顛八倒しつてんぱつとうの苦に入つた時、外道の大臣に反して、耆婆ぎば大臣だけがそれを喜び、世尊の教えを受くべきことをすめます。その時、世尊の月愛がつあいざんまい三昧の光力が、阿闍世の体の瘡を治した時、耆婆は、世尊の大悲を説いて「譬えば一人の親に七人の子があつた時、その中の一人が病になれば、親の心は平等でないのではないが、しかも病む子において心則ち偏えに重いがごとくであります。如来も衆生において平等でないのではないが、しかも罪ある者において、心則ち偏えに重いのであります。」と答えております。

衆生は底なき生死の苦海に沈んでおります。一尺一丈の網で底をはかることはできません。如来の無限絶対の大慈悲のみが、心の奥底に徹到して、人を本質的に蘇らすのであります。

一度罪につまずいた人間は、それが改悟しようが、懺悔しようが、最後の最後まで罰せねば気がすまないというような意は、日本国では、冷たいと見える法律にさえありません。いわんや道德の世界がその意で成り立ちましようか。さらに人を根本的に救い更生せしめんとする宗教の世界が、悪人正機でなくて何としましよう。

念仏行者の反省すべき点

だが、悪人正機の世界が、世の人からさげすまれるに至つたことは、念仏行者もまた反省しなくてはならない多くのものを持つているようであります。それは悪人正機の大慈悲に救われないうで、悪人正機の法を弄んだことでもあります。親鸞聖人の教えの上に微塵も危さや害毒があるのではない。それを聞いて念仏する者に、あいすまないことがあつたのであります。

火は油を燃やすものである。火は汚いものを焼いて火にするものであります。熱は、氷を解かして水にする。春の温かさは、一切の草木に芽を出さしめる。それと同じく、如来の大慈悲の火は、煩惱の油を燃やし、罪惡の薪を焼き、如来の大慈悲の熱は、衆生の凍れる煩惱の水を解き、大慈悲の春暖は、衆生の生命となつて、眞実礼拝の手を、柔軟の心を、如来讚嘆の口を、願生の意を、自然に生ぜしめずにはおかないのであります。しかるに、得手えてに聞いて勝手にいき、火の燃えぬ、煩惱のままが、悪人正機の道理で自分の言いわけをする、それが悲しい今の浄土眞宗の大部分の相であります。それはけつして仏道ではあり得ません。

「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」

この一句は、純粹宗教の世界を明かに示された不朽の金言であります。一切の宗教が、至らんとする最後の境であります。しかるに世には「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」と考えている人が多い。これならまだしも、さらにそれよりも、もつとたくさん、「悪人は往生はできない。善人でなければ救われはしない」と考えています。そのように考えている人には、そこに幾多の間違ひがありましようが、その二三を挙げてみますと、

- 一。自己の眞実の相を知らぬこと。
 - 二。人生の眞相を知らぬこと。
 - 三。大慈悲の世界を知らぬこと。
 - 四。眞実宗教の使命を知らぬこと。
- などが数えられると思われます。以下これについて述べてみます。

自己の眞相

世に何が哀れだと言つても、自分の眞実の相を知らぬほどのあわれはあり得ません。自分の眞の相を知らなければ、知らない自分の悪心が外に出て働きます。心の一番底にあるものが一番上に出て不知不識しらずしらすの間に働いています。そして自分の周囲を傷つけつつ、それがはね返つて自分を暗くし、自分を傷つけています。

ここに悪人と言うのは、外に向かつて悪を行じよと勧めるのではなく、外への悪人ではなくて、内心に自己の眞相を見出してゆく悪人のことであります。蓋けだし人が人たるゆえんは、内観の世界を持つこととあります。慚愧とか懺悔とかの尊ばれるのは、人が畜生ばなれをすればするほど、内観の世界を持つ事を示されるものであります。人間である以上自己を知る。内に何があつてものを言うかを知る。この人間の持つ尊厳さが、教えによつて深められて行つたところに、聖者の心境があるのであります。

聖者は自覚せる悪人であります。自己のなせる善を認めてそれにとどまつていられないで、限りなく内へ内へと自己を耕してゆく、しかして、心の奥底をつきつめて、そこに、久遠の無明といい、根本の惑という「本罪」を知つて、それを破つた人であります。自己を善人と思ひ、自己を智者となす一人の聖者もないのであります。

善導大師は「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」と言い、横川の源信大師は「極重悪人唯称仏」と合掌し、吉水の法然上人は、「愚痴の法然坊、十悪の法然坊」と懺悔し、親鸞聖人は「愚禿親鸞」と名告り、「いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と投げ出されました。古今軌を一にして、大聖者は、大愚大悪の境に至られたのに対し、あさましい凡夫は、自己を善人となし、智者として高上りしているのであります。

内観の世界において停とどまるものは、道を成就することにおいてとどまるものであり、生活において進むこと、往生してゆくことを停止せるものであります。自己が停まる人は、人をも停めます。

しかしてかくのごとき内観の世界は、眼を閉じて考えることによつて成就するのではなくて、教えを聞いて領解してゆくところに成就するのでありますがゆえに、自己を知らぬ者とは、教えを受けぬ者をいうことであります。教えを一生受けてゆかない者は、虎や狼のごとき、自己をそのまま人生の広野に放っている者で、社会を下等なものにする根源となるのであります。

無我の生活態度

仏法者は、無我であります。無我とは、我がトーチカに立ち籠らないで、耳や眼を人生に向かつて開いた人であります。人生から抽象的に生きないで一切人の声をそのまま受け取り、自己において、人生を領解しようとする人であります。一切衆生の悪を自己において見る人であります。一切の窓を開いて、人生に随順しつつ、しかも内観の一道をすてないところに無我の生活態度があります。眞実の道の人は、自己を善人に改造しようとするよりは、われおよび人生のありのままを自己において見出すとします。

悪人正機の宗教が人生において必然であるのはこのためであり、尊い役割を成就するのにもまたこのためであります。一切衆生の上に跳び上つて、僅かな善に高上りする我的人よりも、社会の底に自己において、人類の病を自己において見出す人こそ、人類道義の礎となる人であります。親鸞聖人の「悪人」の世界がそこにあるのであります。しかも、かくのごときは、如来の大慈悲に救われ、信心の智慧を成就しなければできぬことでもありますし、かくのごとき悪人たらねば、領解できぬ大慈悲であります。でありますから、悪人正機の宗教こそは、如来浄土の大慈悲を人間の自覚を通して人生に開放し、廻向顕現せしめんとするにほかなりません。自己を人生から引き離して独善の世界に高上りした者に悪人はいない。かかる孤独の世界は浄土や如来と交渉はない。ただ、独覚我慢の頑固が人の世を傷つけるのみであります。

懺悔業障ということは、普賢の行願であります。高き尊き徳であります。業障の中にいつつ己おのれ一人をよしとする、それが如来を無視する無信心の凡夫であります。大慈悲は必ず、全一な自覚を成就して廻心懺悔せしめずにはおかないのであります。人間業苦の中に埋れて悪心に泣かぬ者はない。それは人生そのものの真相であります。苦勞人はみな、悪心を知る。その時、なんでおめでたい善人救済の感情が間に合います。沈痛な苦悩に泣いた者、それが如来の無碍光によつて救われるのであります。

人生の真相

「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」

次にこの悪人正機の救いを拒む者は、「人生の真相を知らぬ」ものであります。「自己の眞実の相を知らぬこと」は、そのまま「人生の眞実の相を知らぬ」ことであります。

人生は衆生海といわれるように、一切衆生の一人一人の不共業ふくじょうによつて、それぞれの衆生の業報が現れる世界であるとともに、共業によつて具体的に一体となつている

世界であります。だれ一人としてこの生死流転の海から、抽象的に生きることが許されません。それは魚を水から上げられないのと同じであります。

でありますから、われ一人清しとすることも、われ一人善人なりとうぬぼれることもできません。恵まれた人は、その幼き日、父と母とに抱かれて、波も風も受けないで成長します。その時見ている人生は美しいものであります。やがて人生の真相にふれつつ青年期に入つて、実社会に出ます。そこには、さまざまな荒波や、冷たい風が待っています。純真な心にこの寒い風がしみ入る時、はたしてそこにいつまでも汚れない人がいるでありましょうか。心には垢がたまりまます。貪欲、瞋恚、愚痴の三毒を食わねば渡れない人の世であり、自らもまた、三毒の炎をはいて、人を苦しめないではおきません。「心の垢あか」と、経には説かれます。この心垢しんくは何によつて洗われるのでありましょう。

私は、人の身が一個の池のような気がします。眼、耳、鼻、舌、身、意という六つの水の入口を持つ池であります。池の底には、泥があります。清く清らかに水がそそがれている間、池は清く静かでありましょう。しかし、この池には、六つの入口から、毒が流れこみ、あるいは汚い悪い水が流れこみ、それによつて、自らもまた、毒を池の底から発してこれを他の池に流しこんでゆく。

小さい時から、父の怒りが子の怒りに、子どもの不徳が親の歎きに、夫の非道が妻の愚痴に、一波ゆらげば、千波万波がはてしなく広がつてゆきます。ましてや、この池が悪逆の毒手にかきまわされる時、その底からは、いくらでも泥を吹き上げて、池は濁悪不善と濁つてゆく。わが一言一挙手一投足が、わが周囲の池の水を濁してゆくと。かくして人の世は五濁悪世となつてゆくのではあるまいか。かつての日の箱入り娘も、今は、呪いと愚痴と自暴自棄の幽霊のような妻となり嫁となる。修養も、嗜みも、表面だけならどうでも包んでいられよう。しかしその濁れはてた心、垢のため、重く暗くなつた心をどうすればいいのでしょうか。そこに開いてくるのが、悪人正機の大慈悲の世界であります。

五濁悪世

具体的な人生は濁れはてています。五濁悪世と言われるのがそれです。この五濁悪世に出でたまい、五濁悪世の時と機に相応して説かれた真実道がすなわち念仏道であります。阿弥陀経には、

「釈迦牟尼仏能く甚難希有の事を為し、能く娑婆国土、五濁悪世、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の為に、是の一切世間難信の法を説く。」

とあります。世間難信の法とは弥陀本願の法のことです。五濁悪世、すなわち時の濁れ、思想の濁れ、生活の濁れ、社会の濁れ、命の濁れと、こうした五濁悪世に生きる者が、己一人清しとすることができましようか。

仏法における悪人とは、こうした五濁の中にあつて、自らの内観を通して自己において衆生界の悪を見る人のことでもあります。六つの入口の扉を開いて、濁らば濁れ、澄まば澄め、ありのままを凝視深信して、大地にひれ伏して、悪人に覚め、その混濁

の中に廻向したもう大慈悲の白蓮華、お念仏の中に生きさせていただく者こそ、眞実自然の生活者であります。

少女と澄み、乙女と濁り、妻と汚れ、母と苦しみ、世の荒波に悩み、やがて末に老婆となつて、愚痴のみに暗い人もあれば、信心の智慧によつて、内観の一道を恵まれ、濁悪の真相を自己において見つめ、本願の白蓮華を泥中に吹かせて、無碍の一道を歩む人もあります。一切衆生とともにあればこそその悪人であります。しかも一切衆生の罪惡をわれにおいて見つめ、懺悔の心に生きればこそその悪人であります。悪人といひ、愚者とよぶ、念仏の大乗の意味がここにあるのであります。かの自らの小善を鼻にかけて、世間を裁き、やがて白眼一世を呪うてこの世を終る善人のごときは、惡逆のままにはびこつて、われと人生を知らぬ者に、念仏道はわからぬことであります。人生はかかる善人、かかる悪人によつて傷つくのであります。

「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」

悪人をこそ救いたもうことを真に領解する人は、大慈悲を領解する人であります。久遠の大慈悲はこの人を中心として人の世に輝くことであります。

大慈悲

悪人正機の世界を嫌う人は、第三に「大慈悲の世界を知らぬ」のであります。善人を愛し、賢者を求め、美しい人を好むのは、人の心であります。しかしそれは、愛の世界であります。

愛の前に開ける世界と、大慈悲のうちに撰取せられる世界と、人の世には二つの世界があります。

人間の世界の親ですら、病む子、悪い子、不幸な子、不具な子どもにその慈悲の心は深い。優れたものをよしとする世界の半面に、劣れるものを不憫とする半面があります。まして、久遠の大慈悲の前に、だれか、哀れに不憫でないものがおりましよう。「憐愍善悪凡夫人」善といひ悪といひも、ともに凡夫であります。だれか鳥の雌雄を知らんやであります。善悪によつて憎み合うことのみを知る者にとつては、己の善と他人の惡とは天地の差に見えても、他よりすれば、二匹の犬の喧嘩にすぎませぬ。ともに大悲の前には悪人に違いなく、憐愍されることは同一であります。内に眼が開かれたならば、ともに大悲の前には、悪人であります。「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」大慈悲の前に開けた世界であります。人間の間違つた理性によつて承認された世界ではないのであります。

大慈悲

「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや。」

この一句はまことに、宗教の一番深い趣を表現された不滅の聖句であります。人間の間違ひに満ちた迷妄なる理性によつて承認された世界ではなくて、大慈悲の前に開いた無限広大なる世界であります。いかなる悪人愚者をも抱き上げずにはおかぬ、そしてそれをそのままにはおかぬ大慈悲、いかなるものも、これを至善の領域にあらしめ、いかなる愚者をも、如来の智慧によつて、如来と同一の世界にあらしめねばおか

ないという、利他の大慈悲の充実に生きた世界であります。それを領解した念仏行者の自証の世界が「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや」との一句となつて表れるのであります。

しかるに、世のひと、すなわち通俗的、常識的な世界の人が、「悪人なほ往生すいかにはんや善人をや」と考えるのは、人間の心、すなわち、善人をよしとし、賢者を先とするところの相對愛の世界、理性の世界、倫理の世界をもつて純粹なる大慈悲の世界に混入するからであります。しかしそこには、おしつめた最後に善人も危ぶみ、悪人はいよいよ自暴自棄するところの小路よりほかに、行きづまりよりほかに、ないのであります。そしてそれは、人生の根本的成立の礎ではありません。

人生は冷たい裁きによつて成立するのではなくて、いかなる氷をも溶かさずにはおかないという大慈悲を、畢竟依ひつきようえとすることによつて成立するのであります。かの国家社会に害毒を流すがごときいわゆる悪党が、一朝にして、大地に合掌して妙好人となり、懺悔感謝して世の光となるがごときは、操行点を、甲乙丙とつけ、優等児のみが、意気揚々として表彰される世界や、冷たい監督の眼ばかり光つて、微塵の落度さえ許さない拘束や、桎梏しつこくの中からは生れてはきませぬ。かかる世界では、良い娘も、悪い嫁となり、悪い青年はますます悪くなるばかりであります。

宗教の使命

悪人正機の世界を危ぶむのは、宗教の真髓について真に知らず、宗教の眞の使命を知らぬがためであります。火には火の使命があり、水には水の使命があります。道徳7には道徳の、哲学には哲学の、芸術には芸術の使命があります。道徳が善人を要求するということ、それは当然のことでもあります。仁義礼智信など、人間五常五倫の道を歩むべきことは言うまでもないことでもあります。だからと言って、宗教が悪人正機の大慈悲を説いたからとて、けつしてそれと矛盾することでも相反することでもありません。軍人には健康体を要求せられる。しかし、病人や負傷者は、手厚い医療や看護を受け、しかも重患において丁重であります。

だれでも、少しく内観の世界を持ち、わが心の真相にふれはじめた者にして、罪悪深重のわれを見ずにすむ者があり得るでありましょうか。ここに悪人とは、外へ悪を造れという奨励ではなくて、内に悪を凝視せよとの教えであります。仏法は、全く内への解脱を説くものなのであります。内への目覚めは大悲のまごころによつて成就するのであります。

人は生れてきたことを知り、やがて死のあることを知っています。生死は現前の事実であります。この生死罪濁の己を知る時、そこに生死を超えて生きる解脱への道を求めずにはいられませぬ。悪人正機の世界は、眞実なる自己、偽らざる自己、人生の真相を知つて、その偽らざるわれの全体が、久遠の眞実に救われてゆくところの、宗教の極髓を開顯せられたものであります。

人間は正しい宗教によつてのみ、眞に正しく明るく、本質的な道の上を生きてゆくのであります。人間が死んだら消えるものだと言ひ張つていた賢い人も、わが子の病気には、何でもない迷信に走つて、わが子の病気の平癒を祈つたり、わが子の死に出

あつて、「人の死は蠟燭の火の消えたと同じだ」というような素朴な唯物論が一度に壊れたり、他力本願を嘲笑していたものが、今日は冷たき牢獄の中にいたり、そうしたことはみな、真実宗教の人生に必然であるべきを知らしむるものであります。

ましてや、如来本願の大慈悲は、いかなる悪人にも善人にも、平等に、如来浄土の清浄真実なる信心の火をその胸中に点じて、人生の一切を浄化し、聖化して、人間の本質的救いを成就するものであることがわかり、悪人正機とは、その救いの内的意味だということがわかるならば、悪人正機の世界こそ、まことに万人の求めているところの最後のものであることが知られましょう。

われらは、念仏を罵倒しつつ学問を鼻にかける青年よりも、自分を棚に上げておいて世間を憤慨する正義屋よりも、信心の人を嫌いつつ世の享樂に走る人よりも、何よりも彼よりも、大地に合掌して三宝に帰依し、念仏して、金剛心に生かされる人の上に、尊いものを、真実の道の權威を、世の光となれる相を拝むのであります。世の倫理道徳も、この魂の内奥に輝く信の火によつて、いよいよ如実のものになることがわかります。道徳だけの人は、永遠に変らぬとは信じられない、しかし未だかつて真実信心の人にしてこの人を信じて裏切られたことを知りませぬ。

本願他力の意趣

「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねに曰く、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一旦その謂れあるに似たれども、本願他力の意趣に背けり。」

善人正機の考え方は、人間の世界の常識的な相対的な考え方では「一旦その謂れあるに似たれども」、いちおうは道理があるようだけれども、「本願他力の意趣に背けり。如来本願大悲の御意にそむいてるのであります。それは真実の教えにそむき、真実の不行にそむき、真実本願の信にそむき、真実の証果を得ることにそむくのであります。自ら悪人愚者と知り、大悲本願を領解して生きる者こそ、法界成就の法則に随順する真実なる人なのであります。三世一貫の大悲本願にそむかぬ人であります。

第二節 本願他力の意趣

「そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかげたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。」

自力作善

「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」との悪人正機の世界と、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや。」という善人正機の世界と、二つの相違した世界が、第三章の主眼として示されたのであります。しかして、悪人正機の世界は、大慈悲の前に展開した純粹宗教の世界であり、善人正機の世界は、人間の善を是とする常識的な宗教観の前に考えられた世界でありました。そしてそれは「この條、一旦、そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。」と結論されるのであります。

いちおうは、善人こそ救われるという考え方がよいようである。いわれがあるようである。しかしそれは、「本願他力の意趣にそむけり。」如来本願のご本意の趣に相違するのであります。

本節はこの「本願他力の意趣にそむけり。」を受けて「そのゆゑは」と出して、そのゆゑんを表されるのであります。

「そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかげたるあひだ、弥陀の本願にあらず。」

自力作善の人、それは、一見りつぱな人、善をなす人のようであります。それがなぜいけないか。この問いに答えて「ひとへに他力をたのむところかげたるあひだ」と答えられるのであります。他力をたのむところがかげているのがなぜ悪いのでありましようか。「弥陀の本願に非ず」と答えられます。この文はことばが足りないようであります。そこで、この「弥陀の本願に非ず」の句は「弥陀の本願の意趣に非ず」との意であるとか、「本願に相応せず」とかいろいろ言われますが、如来の本願の御意に相違していることを表されたのであります。

自力のこころ

如来の本願の意に相違するのがなぜ悪いか、それは「自力のこころ」が悪いからであります。

衆生の心の底には、恐るべき我が巢食うております。この我は、眞実の智慧の光を知らず、いわゆる無明の闇の中に動く心であります。如来に向かえば、仏智疑惑のこころであります。この無明の衆生は、我のこころに終始して、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の劇毒を呼吸しつつ自損損他するものであります。しかるにこの我は、いわゆる邪見憍慢悪衆生の持つところの、恐るべき罪悪生死の根源でありつつ、しかもこの我の衆生は、我が深ければ深いだけ、自らの善を認めて、他の悪のみを見るのであります。これすなわち、いわゆる「善人意識」であります。

私は今日も毎日、人間の描き出す、恐るべき地獄、餓鬼、畜生への血の絵巻の中に泣く人の訴えを聞きつつ、その大部分が、この善人意識によって生れていることを思うて、私の恐るべきに戦慄することである。自らは悪の花と咲きつつ、しかもこの我をおし進めてゆく。自らは悪の底にいつつ善人意識に立ち、人をことごとく悪人にする心、こうした心は、私にはないと言え、それまでです。一切衆生の持つこの自我、それから生れる八万四千の煩惱、これを自己の胸中に見出して、救いに生きたものが、法然、親鸞のごとき大聖者ではなかったか。しかるに、外に外にと貪欲の幻を追うて走りつつ内には何一つなき、虚仮空漠の悪衆生が、いよいよ、善人意識をつのらせて、虚仮賢善の仮面を被るもの、すなわち衆生であります。この善人意識の我こそ「自力のこころ」と言われるものであります。

自力のこころをひるがえして

「しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。」

ここにおいて、「自力のこころをひるがへす。」ということとは、まことに一大事の因縁と言われるべきであります。「ひるがへす」とは、いわゆる廻心懺悔のことでありません。

しかるにこの廻心は、自力によつてなされることではなくして、「他力をたのみたてまつれば」成就することあります。

「他力をたのみたてまつる」とは、如来本願の真実を信ずることであります。如来の本願真実大悲は、如来の功德大宝海を名号の中に摂取して、これを衆生に廻向して、救いを成就せられ、衆生はこの絶対善を受け取つて大信を成就して救われるのであります。大信心そのものもまた如来の成就したもうところのものであります。ゆえに、仏心そのものの廻向であります。ゆえに、「大信心は仏性なり」と仰せられるのであります。

憶うに、如来の大慈悲は、いかなる悪人をも救いあげずにはおかない、熱い真実であるとともに、その智慧光は、いかなるものをも目覚めさせずにはおかない、清浄にして明らかなる冷徹せる真実であります。一切の無明、我慢が照破されるのは、光明の力であり、いかなる悪業煩惱すら捨てられないのは、大慈悲の力であります。光明によるがゆえに、自力邪見我慢にとどまることはできません。廻心懺悔はこの智慧の光明によつて成就するのであります。しかも廻心懺悔のままに救われてゆくのは、大悲廻向によるのであります。でありますから、内心の悪に覚めれば覚めるだけ、如来金剛の本願力に抱かれて救われてゆく身を知るのであります。

これを「しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば」と言われるのであります。たのむとは「どうぞ」と請求することではなくて、大悲の真実に絶対依憑することあります。ちょうど、兵士が、上御一人の大御心に乗托して、一死奉公の一道を征くように。如来の本願が、全私の事実となつてくださることあります。水車が廻るのは水の力であるように、廻心は本願大悲の功德の重きによるのであります。荒鷲の爆撃によつて、トーチカ陣が吹き飛ばすように、自力の我は、

名号真実の爆撃によって粉碎して、無我の大信心を成就するのであります。かかる絶対他力の大信の自証は、必ず、善人は悪人に、賢者は愚者に転落して、大悲の胸中に帰入するのであります。悪人正機の救いを体験するのであります。

真実報土の往生

相対の小善根をよせ集めて、報土に往生しようとするのは、煉瓦を積んで月に至らんとするがごとくであります。相対の気まぐれな善根によって、仏の心に相応せんとするは、衆生の心内の我の功利的なあさましきであります。相対の世界から、絶対の世界に、汚い手をさしのべるのではなくて、絶対常住真実の国から、相対の上にはたらいてくださる本願力によって、報土に往生するのであります。

報土に往生するものは、かの嫌な、善人意識の我を廻心懺悔して、無我の心に生かされるものであります。この至上善の生きたもう世界において、善人と高上りした者は、悪人とさめて救われ、悪人だと罪に泣く者は、恵まれたる大善に更生して救われるのであります。善悪を超えて、名号の無漏善に乗托するものは、わが真相を見つめて大地に合掌して生きる正定聚の菩薩であります。人生生活の基調もここにありません。

第三節 悪人正機

「煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて 願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よって善人だに往生す、まして悪人はとおほせさふらひきと云々。」

煩惱具足

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを……」

すでに第二章において「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」というのが、聖人の偽らざる諦観深信の告白でありました。

煩惱具足、具足とは煩惱が満足に具わつてそないることであり、欠け目なく持つてゐることでもあります。この煩惱具足の文字こそ、まことにわが真相を言い表したことであります。これはわれらの内観の事実であります。善というも、悪というも、ともに煩惱の両端にすぎない。この煩惱こそは、恐るべき永劫輪廻の、生死大海の波にすぎない。この生死の大海から、大海に生じた波が離れることができないがごとく「いづれの行にても生死をはなるること」ができないのであります。

生死を離れること、真解脱を成就することができないことは、人がいかに努力しても、自分の体を大地から挙げることができないがごとくであります。いかに体を強健にしたところで百年の壽を保ちがたい。医大の大先生も、病になれば、素人の私に異ならない。いかなる善人も、一度「苦惱」に陥るや、限りなく悪心の波をおこして、下品下生となる。されば「苦惱」とは下品下生の事であります。衆生は、生れて死ぬる、死んで生れる、この生死は、罪惡とともにあり、罪惡生死を離れんとすれども「いづれの行もおよびがたき身」であります。

願の本意

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば……」

如来本願のおこりは、悪人を正所被の機としたもうことを示されたものであります。

「一には深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫こうけつより已来このかた、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。」

現在にも助からず、過去にも流転し、そして尽未来際助からないところの、無有出離之縁の凡夫を「あはれみたまひて」本願をおこしたもうたのであります。

大無量寿経をもつて領解するかぎり、如来本願は一切衆生において平等であります。しかるに大地の人間の心に随つて説かれた観無量寿経をもつて領解すれば、上品上生よりも下品下生において厚いのが大悲の本願であります。これ平等門のうちに、悪人正機の差別門が開かれるのであります。

凡夫の愛は、徹頭徹尾、差別の愛を求めないのであります。他をかえりみない愛を求めるのが貪愛であります。この貪愛の煩惱によつて求められ、またそれに与えられる本願ではなくて、平等に一切衆生を助けたいではおかないところの大慈悲、その平等の大慈悲を、われ一人のためと受ける心、その心の中に久遠の秘密として開かれるのが、悪人正機の差別門の大慈悲であります。でありますから、この悪人正機の救いは、善人より悪人に、賢者より愚者に、内観深信することを通して開いてくるようになっています。

これ、觀經に、上品上生より下品下生に至る九品の差別を示しつつ、しかも念仏の大益は下下品において厚いことを示され、下品においては、念仏一行を説き、流通分に至つて、念仏一行を付属せられるのは、悪人正機の世界が、あくまで、上品上生たり得るとの善人意識の人に領解せられず、愚者となり、悪人たる自覺の人の上に開かれる世界であることを示されたものであります。

他力をたのむ悪人

でありますから、次には、

「他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。」

と説かれました。他力をたのみたてまつる悪人とは、大悲の本願を領解したる悪人のことであります。

子細に頂きますと、この「他力をたのみたてまつる悪人」ということの中に、きわめて重要な一切は含まれているようであります。肝要にして不可欠の重大事は、他力をたのむ、すなわち他力本願を信ずること、仏の大慈悲に生かされるということであります。

それはちょうど日本においては、いかに人格者と言われようが、腕があろうが、頭があろうが、上御一人に対して不忠なるものは、国民とは言われませんがごとく、またたとい、百貫の炭もこれに火がついていないならば、これによつて温まるに由なきがごとく、親不孝の子には、諸悪限りなく生ずるがごとく、本願を信じない、大慈悲に生かされないということは、一切を失うことであります。

善人というも、悪人というも、すべてこれ表面の事実であつて、内心には、久遠の聖火に焼きつくされず、智慧光に照破せられず、小我の自力を捨てず、廻心懺悔せず、無我の大信を得ず、真の歡喜を得ず、常住の大道を得ることができないのであります。

浄土の真宗は、觀無量寿經の意に立つて、大無量寿經の御意をいただくところにあります。大無量寿經は、その説法の對機が、すべて普賢大士の徳に生きる尊い菩薩であり、神通已達の大聖たちであります。大經こそは、絶対不二の尊高なる真実教であります。

しかるに觀經は、機の真実、すなわち生死海に生きるところの、下品下生の悪機を打ち出す役目をはたす經であります。この下をつめた悪人こそ、本願の名号によつて救われるべき機の真実であります。

この極悪底下の悪人に、唯一最高の法が廻向せられるのが、浄土の真宗であります。そこに「他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。」との断定があるのであります。しかしてここに悪人とは、これまで幾度もくり返すがごとく、外への悪人ではなくて、内に覚めたる悪人であります。一切衆生の悪の真相を、自己において見る悪人であります。であるがゆえに、親鸞聖人といえども、法然といえども、善導、道綽といえども、さらに一切菩薩といえども悪人であります。如来清浄光に照らし出されたる悪人であります。「よて善人だに往生す まして悪人はとおほせさふらひぎと云々」のことばも領解せられることであります。念仏すれば善人でも往生す、まして悪人は必ず往生するのであります。悪人正機の宗教こそは、宗教の機微、真髓を語るものであります。